OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国新疆の農村地域におけるマハッラの社会的仕組みとその機能 : 1990年代を中心に
Author(s)	阿布里米提, 热孜万; 大谷, 順子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2018, 44, p. 281-296
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68302
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国新疆の農村地域におけるマハッラの社会的仕組みとその機能
—1990 年代を中心に—

リズワン・アブリミティ（热孜万・阿布里米提），大　谷　順　子

目　次

１．はじめに
２．マハッラについて
　２－１　マハッラとは
　２－２　マハッラの形成プロセス
　２－３　マハッラの名称、規模など
　２－４　マハッラの意義
３．マハッラにおけるモスクとその文化的機能
　３－１　マハッラにおけるモスク
　３－２　モスクの文化的機能
４．相互扶助システム
　４－１　生産活動における相互扶助
　４－２　日常生活における相互扶助
５．マハッラにおけるジャマアット
　５－１　ジャマアットとは
　５－２　ジャマアットの活動
６．おわりに

中国新疆の農村地域におけるマハッラの社会的仕組みとその機能
—1990 年代を中心に—

リズワン・アブリミティ（热孜万・阿布里米提），大　谷　順　子

1．はじめに

中国新疆南部のタリム盆地周縁に点在するオアシス地帯は、歴史上シルクロードの要衝として知られてきた。これらのオアシスには、古くから伝統的な地域社会が形作られ、それらはマハッラ（現代ウイグル語表記：Mehelle）と呼ばれた。

マハッラは、中央ユーラシアのムスリム居住地域に広く存在する地域社会の末端単位であり、人々の生活空間を示す重要な概念である。もともとアラビア語に由来し、中央アジアや中東ムスリム地域で街区を指す用語として広く用いられている。中国新疆南部の場合は、マハッラは 20 世紀末まで、とくに農村地域においてオアシス民であるウイグル人の伝統的な居住形態を示す象徴であった。長い歴史の中で地縁と血縁関係に基いて形成され、独自の秩序と自律性をもって存続してきた。その存在意義は現在においても依然として大きい。

マハッラに関する先行研究は、主に歴史的観点から中央アジアのオアシス都市を中心に行われてきた。例えば、19 世紀から 20 世紀初頭のブハラにおけるマハッラの構造を解明した旧ソ連の民族学者のスーハレワ著『後期封建都市ブハラの地区共同体』(Sukhareva 1976) は、現在でも中央アジアの伝統的なコミュニティー研究において最先端の研究成果であるとされる（ダダバエフ 2006:15）。また、小松久男「ブハラのマハッラに関するノート」（小松 1978）は、このスーハレワ著作の資料的価値に注目し、膨大な研究成果を整理したものである。近年出版されたダダバエフ著『マハッラの実像』（ダダバエフ 2006）は、中央アジアにおけるマハッラ研究の力作といっても過言ではない。著者は多くの文献と自らの調査データの分析により、ウズベキスタンを中心に中央アジア諸国におけるマハッラの実態を明らかにした。

しかし、上記の旧ソ連領中央アジアに関する研究成果に対し、同様に中央ユーラシア地域の一端を構成する中国新疆南部におけるマハッラに関する研究は極めて少ない。しかもマハッラにおけるイスラーム寺院のメスチトを中心に活動を展開するジャマアット (Jamaat) という長老の集団を対象に行った調査研究である。哈徳江「ウイグル人のジャマアットに関する研究」（哈徳江 2000）と、司馬義「ウイグル人村落におけるジャマアットの機能に関する研究」（司馬義 2011）は、いずれもジャマアット集団の社会的機能と

役割に注目した研究成果である。哈徳江の研究は、文化人類学の視点から宗教文化的な要素を有するジャマアット集団がウイグル人社会の近代化において果たしている機能について検討したものであり、司馬義の調査は、哈徳江の研究を踏まえたうえ、新疆東部に位置するトルファン地区ピチャン（鄯善）県の村落をフィールドにしてウイグル人農村社会の構造とその変遷を詳細に記述したものである。

新疆におけるウイグル人人口の分布情況を見てみると、大部分のウイグル人が南部の農村地域に居住していることがわかる。このような人口分布を背景として考えるとき、当該地域のマハッラにおける伝統的社会の仕組みについて研究することは、ウイグル人社会の構造を理解する上で重要な作業である。しかしながら、上述の先行研究においてはジャマアット集団を対象に展開された研究の成果は幾分示されているものの、マハッラを対象に行った研究は皆無に近い状態にある。そこで本稿は、地域社会に基づく人間関係の繋がりを切口に、中国新疆南部の農村地域におけるマハッラの伝統的社会の仕組みとその機能について明らかにし、マハッラの実態を立体的に呈示することを目的とする。

本稿は主に 20 世紀 90 年代におけるマハッラの実態を軸に論じることにする。その裏付けとなる資料は、筆者らが 1996-98 年にかけて行った現地調査により収集したデータに基づく。その後、2010 年に開かれた中国中央政府による「中央新疆工作会議」は、新疆社会に大きな変化をもたらした。それは、政治、教育、民生、インフラ整備、震災復興など多方面にわたる支援事業の実施と、社会体制の再建を打ち出した新たな政策であった。この政策がとくにインフラ整備と民生事業による新しい居住地域、及びコミュニティー作りに力を入れた結果、それまでに維持されてきたマハッラという伝統社会の仕組が新しい地域社会のあり方へと再編されることとなった。こうした変化が起こる前の伝統社会の仕組みとその機能を明らかにする本稿での試みは、今後新たに形成される農村社会の地域コミュニティをとらえるうえで、基礎的なデータを提供することになると考えられる。

2.マハッラについて

2-1. マハッラとは

マハッラは外観的には、通りの両側に沿って家々が並ぶ集合的な居住地の一区画と見なすことができる。『維吾爾語詳解辞典』（詳解ウイグル語辞典）によれば、「マハッラとは、都市、或は農村地域において幾つかの街区が含まれる小区である。」（阿布利孜・牙庫甫等 1996:157）とされている。また、『維吾爾民俗学概論』（ウイグル民俗学概論）には、「家族、或は親戚関係によって形成された社会的共同体とその組織を指す」と述べられている（阿布都克里木・热合曼等 1989:111-113）。明らかに前者は地理的な特徴に注目した解釈であり、後者は血縁関係に基づいた定義付けである。実際、ウイグル語のマハッ

ラという言葉は、一定の居住空間を意味するだけではなく、ある種の地域コミュニティーとしての人々の生活共同体を意味するものでもある。そういう意味では、マハッラとは、一定の居住区画を示す地域であると同時に、血縁関係及び以下に述べるような地縁関係に基いて形成された地域コミュニティーを指すものである。

2-2. マハッラの形成プロセス

そもそもマハッラのはじまりは、地縁や血縁関係に基づく居住区域が時とともに拡大していったこととされる。現在のところ、その歴史的な形成プロセスの実態に関する実証的な記述や報告書といった資料は見当たらない。しかし、概念的には大凡以下のような過程が伝承されている。

ある家の男の子が大きくなって結婚し、実家の隣に住まいを構える。次にその息子が大人になって結婚すると、またその隣に家を建て住むようになる。更にその子孫が周囲に拡大しながら隣接して居住する。つまり、できるだけ実家の近くに家を設けるようにする。こうして、次第に親族によるマハッラのコミュニティーが形成されることに至ったと想定される（リズワン 2001:39-48）。新疆南部ではいまでもアイマク (Aymaq) という名称のマハッラが存在する。アイマクとは、もともとの意味は「閨閥関係」、「同姓氏族」と解釈される。この解釈が上述のマハッラ形成のプロセスを裏付けることができるかどうかは、歴史学的な検証を待たなければならない。『維吾爾族習俗』（ウイグル人の風俗習慣）は、このような概念的な認識についてもっぱら血縁関係がマハッラの形成に果たした役割の重要性を強調している（阿布都克里木・熱合曼等 1996:111-113）。

新免康らの研究は、1990 年代に行った現地調査によって当地域で広く伝わっているもう一つの語りを明らかにしている。それによれば、「マハッラというのは、一つのメスチト（イスラーム寺院）に集まる人々によって形成される。もとのマハッラに 7 人の子供がいれば、その子孫たちが 7 つのマハッラを形成する。あるマハッラでは、90%が同じ先祖をもつ人々であり、10%が外部からの人々である。」（新免ら 2002:126）ということである。現在の実際のマハッラは、必ずしも親戚同士によって形成されるという形態をとっているわけではない。

2-3. マハッラの名称、規模など

マハッラの名称の多様性は、その形成過程の議論に更なる可能性を提供している。マハッラの名称は地域の特徴と密接な関係をもっている。それは、地勢の特徴を示した名称、住民の性格や特性に由来した名称、宗教行事に関連した名称など、多肢にわたっている。中でも最も特徴的なのは、祖先が営んできた職業や現在従事している職業にかかわる名称である。例えば、茶 (Chay) マハッラ、鍛冶 (Tomurchi) マハッラ、陶器 (Kulalchi) マハッラなどである。『洛浦県地名誌』の記載によれば、新疆南部に位置するホータン（和田）地区洛浦県チャルバク（恰爾巴格）郷政府から西南 5.3 キロメートルのところに 33

世帯の住民を有するマータン（麻糖）[1]・マハッラがある。当該資料の解釈によると、「マータン・マハッラは古くからマータン職人が多く、それ故の名称である。」（『洛浦県地名誌』1989:70）という。何れにしても、マハッラの名称の由来は、それぞれのマハッラの人々の生活基盤を反映しているのである。

一般的にマハッラの規模にはかなりの差があり、10 世帯足らずの小規模なものから、100 世帯を超える大規模なものまで、種々様々であるが、僻地になるとマハッラの規模が小さくなるのに対し、町の近くになると、その規模は次第に大きくなる傾向にある。例えば、新疆南部のホータン地区カラカシュ（墨玉）県北部のトゥズルックオタック（吐孜魯克奥塔克）村のマハッラは概ね 10 世帯から 20 世帯規模であり、同じくカラカシュ県中部のトフラ（托胡拉）郷のマハッラは 80 世帯を超える大規模なものである（『墨玉県地名図誌』1985）。

2-4. マハッラの意義

マハッラは歴史上様々な行政区画の単位として一定の役割を担ってきた。現在中国の政治体制の下では政府の行政管理の単位になっておらず、場合によっては 3-4 のマハッラが一つの政府行政機関の管理下におかれている。また、マハッラ同士の間では明確な境界線もない。しかし、人々のマハッラに対する帰属意識は強く、依然として地域的なアイデンティティをもっている。文化人類学者の王建新により現地調査に基いてまとめられた論文には、類似する事例が記載されている。それによれば、新疆東部のトルファン盆地の中央部に位置するトルファン市街から東南 30 キロ離れたところに位置するチャトカル（恰特喀勒）郷という村落に、コシ・グンベズ (Qosh-gombez) というイスラーム教徒の聖者廟がある。その聖者廟の両側の住民は、居住地域が同じ行政区域に属しているにもかかわらず、自分たちは向こう側の人たちとは違うと、互いに主張するという（王建新 1996:45）。この事例には確かに幾分当該地域の歴史的背景が反映していると考えられ、一般化できない要素が含まれる。しかし、マハッラの住民が心理的に明確な境界線をもっていることは明らかである。そいう意味では、地域社会への帰属意識という側面から、ウイグル人にとってマハッラの存在意義は依然として大きいと言わざるを得ない。

3. マハッラにおけるモスクとその文化的機能

3-1. マハッラにおけるモスク

マハッラには基本的にモスクが設置され、人々の生活と密接に関わっている。これはウイグル人がイスラーム教を信仰する特徴の一つでもある。清朝末期の新疆省布政使王樹枏らによって編纂された『新疆圖誌』に、「纏民（＝ウイグル人）には数十軒の家に必ず寺院（＝モスク）があり、寺院には必ず学校（＝塾）がある。」（『新疆圖誌』民国 12 年：学校）とあり、当時の情況を明らかにしている。モスクがマハッラの中心を示している

特徴は、執筆者らが 1996 年 9 月に行った調査でも観察された。曹紅『ウイグル族の生活様式』は、同時期の特徴について具体的に示している。「イスラーム教が外観的に最も特徴付けているのは、新疆南部の至るところのマハッラに様々なモスクが設置されていることである。モスクというイスラーム教の殿堂はウイグル人の日常生活と密接に関わっており、ある種の生活様式を形成している。」（曹紅 1995:46）

実際、イスラーム教を信仰するマハッラの住民にとってモスクは、単なる礼拝を行う聖所というだけでなく、マハッラ内部の様々な行事や問題に関わる相談ごととその解決、また、共有財産の使用や管理などを行う場所であって、人々の日常的な活動において極めて文化的な機能を果たしている。例えば、モスクは祭日にいろいろな行事を行う場所として、毎年春分の日を迎えるに際し、マハッラの男性は火棚を作って火をおこし、女性は一箇所に集まって春分の料理を作って皆に振る舞う。すなわち、モスクの文化的な機能は、とくに年間行事や冠婚葬祭において具現化していると言えよう。注目されるのは、その際にモスクの宗教指導者が深く関わっていることである。1990 年代に新疆社会科学院がホータン地区カラカシュ（墨玉）県において行った調査は、この点を裏付けている。「（マハッラにおける）人々のイスラーム教に対する敬虔な表れは、冠婚葬祭において最も顕著であり、婚礼と葬式の際には、必ず地域の権威あるモスクのイマーム（宗教職事者）が執り行っている。」（続西発 1991:130）

3-2. モスクの文化的機能

葬式は、モスクが冠婚葬祭を執り行う場所となる最も代表的な儀式の一つである。マハッラの葬式、ひいてはウイグル人の葬式は極めて厳かな儀式であり、一連の宗教儀礼をともなうことになる。実際、イスラーム教の教義に遵い、死者を埋葬する前に遺体を清めてモスクに運び、祈祷を捧げるとともに、参列者との告別を行うことになる。これらの儀式や行事はモスクの長老や死者の家族、それにマハッラの人々の参加と協力によって行われ、完成される。とくにモスクの指導者や長老[2)]の役割は大きい。この点について、哈徳江の論文は民俗学的なアプローチによる具体的な事例を挙げた上で、「死者を祭る行事や儀式の多くは、モスクの宗教的指導者が執り行っている。」と指摘している（哈徳江 2000:200-219）。こうした一連の行事や儀式の実施は、モスクの宗教指導者や長老たちとマハッラの人々を自然の形で繋ぎ合う働きを示しており、その中で、モスクは地域共同体として活動する一つの場を提供している。

マハッラの婚礼はモスクの文化的機能を如実に体現する、もう一つの儀礼である。前述の哈徳江が指摘するように、婚礼の前に、結婚する二人の幸福と式の無事を祈る儀式を行う。これは、婚礼を行う新婚さんの家で招かれたモスクの長老たちが『コーラン』を一節ずつ朗読し、アッラが結婚する二人の平安と幸福を賜るよう祈祷を捧げる儀式である（哈徳江 2000:200-219）。また、婚礼における宗教指導者の役割についてダダバエフの研究は、中央アジアのウズベキスタンの例を取り上げて叙述している。それによれば、

婚約や結婚式を行う場合、当事者となる家にモスクの宗教指導者であるイマームを招き、家の中に式場を設営した上で祈りや宗教的な儀式を行うということである（ダダバエフ 2006:86）。これは、筆者らが 1996 年 9 月に新疆南部の農村地域において行った調査の事例と一致している。実際、新疆南部の場合は、マハッラにおける結婚の準備から婚礼の儀式まで、その段取りと手順はダダバエフの叙述と概ね大同小異である。

以上の内容からも窺われるように、マハッラにおけるモスクは単なる宗教施設として存在するだけではなく、またマハッラは単なる居住空間として存在するのみならず、これら二つの物理的な存在がマハッラの年間行事や冠婚葬祭といった儀式を通して有機的に結びつけられている。そのことにより、マハッラが地域共同体として特徴づけられ、モスクの長老たちはまさにこの特徴を促進させていると考えられる。このような地域共同体のあり方は、ある種の独特な文化風習として、マハッラ、ひいてはウイグル人の行動様式や精神世界に浸透し、極めて顕著な文化的機能を果たしている。そして、マハッラの結束力を維持し、その成員の帰属意識の形成を基礎づけている。

では、地域共同体は具体的にどのようなメカニズムによって支えられているのか、以下の点に注目したい。

4 . 相互扶助システム

4-1. 生産活動における相互扶助

マハッラのもつ役割には、生産活動における相互扶助システムとしての機能が大きな比重を占めている。新疆南部のオアシス地帯では主な産業が農業である。しかし、厳しい自然環境からの制約を余儀なく受け、毎年干ばつ、洪水、農地のアルカリ性土壌、そして砂嵐などの災害に見舞われることが多い。また、農業技術の立ち遅れも加わり、農繁期には如何にして短時間で最大の収穫が得られるかが最も難しい課題である。

新疆社会科学院が 1987 年に行った調査では、このような厳しい環境の中で行われている「換工制度」の存在を明らかにしている。「新疆南部の村落におけるマハッラでは、人々の間で契約によらない自発的な「換工制度」が行われている。農繁期には、マハッラの住民が互いの家の播種と収穫の時期をずらして順番に農作業を手伝う。これは、地縁関係によって生産互助組織を形成し、各家の労働力不足を解消するという近隣同士の親密な関係を示している。」（続西発 1991:132）とされる。「換工制度」の存在は、筆者らの 1996 年 9 月に行った現地調査においても確認された。新疆南部のカシュガル地区コナシェヘル（疏附）県に位置するブラクス（布拉克蘇）郷オスタンボイ村に在住する 23 才の青年が農繁期における相互扶助の実態について語ってくれた。彼によれば、農繁期、とくに収穫の季節には、家の農作業は兄弟や親戚、それにマハッラの人々に手伝ってもらっているという。

近年の調査研究でも類似する事例が報告されている。司馬義の論文に紹介されている

「換工制度」に関する記述はこの点を裏付けている。新疆東部のピチャン（鄯善）県ディフカンス（迪汗蘇）郷マイ村におけるインタビュー調査では、「農繁期の最も忙しい時期には、お隣同士やマハッラの人々が相互に助け合う。今日はこの家の農作業を一緒にし、明日は別の家の農作業をともにする。こうして、集団で作業を行う。」（司馬義 2011:62）ということが明らかになったという。

このような生産活動における相互扶助システムは、年寄りや障害者、それに母子家庭などの弱い者に対しても適応されている。筆者らが 1996 年 9 月に実施した現地調査により、次のような事例が明らかになった。ホータン県のブザク（布扎克）郷に住む T さんは 97 歳になる高齢者である。子どもたちは、長男以外、結婚していてそれぞれ自分の家庭をもっている。T さんは妻と 60 才になる長男の 3 人暮らしであるが、長男は知的障害者であるため、T さん夫婦の世話を必要としている。身体の弱っている T さんは次のように言う。「体調のよいときは近くのモスクに行ってみなさんと一緒にお祈りをする。家では、羊など家畜の世話をしている。土地はもっているものの、年をとって農作業ができないので、食べる分だけの畑仕事は子どもやマハッラの皆さんに加勢してもらっている。」また、当調査における一人暮らしの一女性高齢者の事例もある。この女性には一人娘がいるが、すでに少し離れた村に嫁いでいるため、半月に一度しか実家に戻ることができない。年輩の女性は政府から一人分の農地を与えられているものの、高齢であるため農作業ができない。「マハッラの皆さんに小麦作りを手伝ってもらっている。そのほか、副食など食品もマハッラの皆さんがもってきてくれる。」と彼女は言う。

上記の事例からも窺えるように、マハッラにおける人間関係は相互扶助を基盤に形成されている。厳しい自然環境の中での生産活動は相互の依存関係なくして成り立たない。この点についてマイティライムの研究報告は、「オアシスでは、厳しい自然環境を乗り越えるために、一致協力を絶えず必要とされる。この協力こそがマハッラの内部団結を促進する。このことにより困難な自然環境を乗り越えることができ、生存が可能になる。さもなければ、自然災害に呑み込まれてしまうだろう。」（買提熱依木 1999:99-105）[3] と指摘している。実際、生産活動におけるマハッラ成員相互の関わり合いは、厳しい自然環境によって必然的に形成されたことは否定できない。ただし、このような相互扶助に基づく人間関係は、生産活動という側面のみに限定されているわけではない。マハッラのもつ機能は、ウイグル人社会における伝統的な慣習として定着し、生産活動以外の日常生活の隅々にまで浸透している。その詳細については、次節で述べることにしたい。

4-2. 日常生活における相互扶助

『維吾爾族習俗』によれば、マハッラの相互扶助活動は、その概念の範囲が広く、生産活動から日常生活にまで及んでいる。それゆえ、同じマハッラの出身者同士は親戚であるような感覚をもち、なによりも仲睦まじくすることを重要視するという（阿布都克里木・熱合曼等 1996:111-113）。マハッラにおける相互扶助の機能は、このように生産活動だ

けではなく、対人関係全般において重要な役割を果たしており、とくに前述のように冠婚葬祭において最も顕著に表れている。

曹紅は上述の著書の中で農村地域における結婚式の様子について次のように描写している。「婚礼はマハッラにとって最も賑やかな日である。一家のめでたい祝事にマハッラの全員が参加する風習が形成されている。婚礼はマハッラの全員一堂に会する食事の機会であり、娯楽である。また同時に親戚や近所の互助活動でもある。婚礼の全過程は依然として風習にしたがって進められ、秩序が整然としている。」（曹紅 1995:46）このような光景は新疆南部農村地域の至るマハッラに見られる。それは、結婚式当日だけではなく、縁談から結納儀式、それに婚礼までの一連のプロセス全般にわたって、マハッラ住民の参加が求められる。実は婚礼の数日前に結婚する家がマハッラの人々を招待する席を設け、結婚式当日の役割分担に関する会合が開かれる。これは、マスラハト・チャイと呼ばれる。ここでの協議により、マハッラ住民それぞれに明確な役割が割り当てられることである。例えば、婚礼の指揮を取る係り、料理係り、テーブル・セッティング係り、お茶係り、客の案内と接待係り、倉庫係りなどである。このような婚礼前後におけるマハッラ住民の参加は、ダダバエフの著書においても類似する中央アジアの事例を紹介している。「歴史的に（見て）中央アジアの結婚式は規模が大きく、その準備には多くの人々が動員される。家族･親族だけではなく、同じ地域の住民の参加は不可欠である。そのため、結婚式に関する会談がマハッラ代表と各家族との間で開かれ、マハッラと関係者間の役割分担と具体的な手配について協議される。これがトイ・マスラハティ（婚礼に関する話し合い）と呼ばれる」（ダダバエフ 2006:93）。

実際、筆者らの調査でも、婚礼において重要な要素の一つがマハッラ住民の積極的な参加であることが確認された。伝統的な婚姻の成立には、両家の親が結婚の条件について直接的に交渉することはできない。一般的にマハッラの長老や権威・人望のある人物が両家を代表して相談し、調整することが多い。『維吾爾族習俗』は、こうしたマハッラの人々の参与について、「マハッラでは、冠婚葬祭が行われると、そのマハッラはもちろんのこと、周辺のマハッラからも心から援助を与えるという貴重な習慣がある。ある家で結婚式が行われることになると、そのことを知った近隣の人々が自発的にその家に出向き、「何か手伝うことはないか」と経済面や他の面から援助を与えることに積極性を示す。結婚式の食事の準備をはじめとして客人の接待・見送りに至るまで、（同じマハッラの）近隣の人々や友人たちが集まって心から手伝うのである。」（阿布都克里木・熱合曼等 1996:112）と言及している。婚礼前後におけるこのような仕組は、もともと生産活動から生み出された相互扶助を更に促進し、マハッラ内部における緊密な関係性を強化するのである。

葬儀の場合も同様である。伝統的な暮らしが生きている社会では、服喪期間はおよそ一年とされ、その間、3 日、7 日、40 日、一周忌など、定期的に様々な宗教儀式が行われる。これらの祭日は同時に弔問者が訪れる日でもある。死者の家族はその都度弔問者

に料理を出したり、亡き人の思い出話を共有したりして、儀式に伴う多くの行事をこなさければならない。上述の哈徳江の研究は、「もし、マハッラで誰かが亡くなった場合、モスクの宗教指導者がいち早く亡き人の家に駆けつけ、葬儀の手伝いをしたり、家族を慰めたりする。また、モスクの長老たちも如何なる急用があっても、如何に多忙であっても、手元にある仕事を控え、速やかに死者の家に行って祈願し、葬儀の手伝いをする。そして、家族を慰め、困ったことがないかを尋ねる。」という事実を指摘している（哈徳江 2000:200-219）。もし、親族や親戚のいない独り者が亡くなった場合、宗教的儀式から葬式まで、すべてマハッラの人々が執り行い、最後の野辺送りまでする。

冠婚葬祭を行う専門業界がなく、伝統的な暮らしが生きている社会では、こうした一連の葬儀の執り行いにおいて、死者の家族は勿論のこと、マハッラの人々にとっても互いの助けが必要不可欠なものであることが十分に認識されている。ここで注目すべきは、冠婚葬祭や年間行事がマハッラの住民にとって日常生活の一部であり、自分たちのこととして積極的に参加する、ということである。このようなプロセスを通して醸成された人間関係は、相互扶助を基盤に生み出されたものであり、互いの盤石な信頼関係が基礎となっている。『維吾爾族習俗』では、このようなマハッラにおける相互扶助に基づいた人間関係を「自然に形成されたものであり、習慣という様態で具現化される。」と位置づけている（阿布都克里木・熱合曼等 1996:111-113）。

5. マハッラにおけるジャマアット

さて、以上の相互扶助システムが具体的にどのような形で運用されているのか、という点に着目するとき、そのまとめ役としてジャマアットと呼ばれる集団の存在が中心的な役割を果たしていることが浮かび上がってくる。

5-1. ジャマアットとは

ジャマアットとは、マハッラに設置されているモスクを代表する長老たちの集まりであり、伝統的な農村社会では多大な影響力を持っている。主にモスクの宗教行事や、マハッラにおける年間行事と冠婚葬祭、さらに人々の日常生活に関する相談事に至るまで種々様々な問題を取り扱っている。マハッラの相互扶助システムにおいて重要な機能を発揮している。

ジャマアットの語源はもともとアラビア語であり、集まり、団結、集団、共同体などの意味がある。一方、現代ウイグル語の使用においては二つの意味が含まれる。一つは、ある共通の目的或いは目標をもって集まる人々のことであり、公衆、大衆、公共をも意味する。もう一つの意味するところは、一人の宗教指導者――イマームの引率で礼拝するイスラーム教徒のことである（阿布利孜・牙庫甫等 1991:523）。実際、ジャマアットという概念はウイグル語では広義と狭義的に理解することができ、広い意味では人々全

体を指すのに対し、狭い意味ではモスクの長老に限定される。

新免康らによる現地調査報告では、ジャマアットの活動について、マハッラにおいて誰かの家で困ったことがあった場合や、家を建て直して人手が必要な場合など、モスクでの礼拝の後に人々に知らせ、ジャマアットはマハッラの全員に呼びかけてその家を助ける、ということであると指摘されている（新免 2002:126）。また、『維吾爾族習俗』でもジャマアットの役割について、同様に記述されている。「誰かの家に病人が出たら、ジャマアットはモスクでの礼拝を終えて病人の家を訪れ、見舞いして慰める。誰かが連絡なしにモスクに顔を出さない場合、その様子を見に家を訪ねる。とくに高齢者に対して常に訪問し、その様子を伺う。」とされている（阿布都克里木・熱合曼等 1996:112）。

5-2. ジャマアットの活動

ジャマアットの活動は、概ね次の 5 点にまとめることができる。1. モスクにおける宗教活動（礼拝など）、2. 病人の見舞い、亡くなった人の家族への慰問、3. 救済支援、4. 孤児の扶養、身寄りのない老人の世話、5. もめごとの解決、である。ジャマアットが行った具体的な活動について、司馬義の研究では、次のような興味深い実例が紹介されている。「昨年某村では、農業用水をめぐって二つの家が争う事件があり、数日後一人が亡くなった。実際亡くなった人には心臓病の持病があったという。この事件をめぐって両家ともに裁判を起こした。しかし、納得のいくような結果を得られなかった。そこで、調停役をジャマアットが買って出た。ジャマアットは、まず、あえて供養の日である木曜日を選び、亡くなった人の家を訪れた。その後お墓に行って祈りを捧げ、宗教的儀式を行った。そして、再び家に戻り、言葉巧みになだめた。とくに近所同士が仇敵になることはイスラーム教の精神にそぐわないということを強調した。最終的に、加害者とされる家が被害者とされる側に一定の賠償金を支払い、解決した。」（司馬義 2011:63）こうしたジャマアットの活動を基にして、司馬義の研究はその役割を 3 つにまとめている。①礼拝、断食、喜捨、巡礼など宗教的義務による役割、②命名式、揺りかごの儀、婚礼、葬儀、祭日など通過儀礼における役割、③文化伝承、社会交流、もめごとの解決、病人の見舞い、救済支援、文化の構築、秩序の維持など社会的役割（司馬義 2011:39-67）。

以上の検討からも窺えるように、ジャマアットの存在とその活動はマハッラにおける日常生活の隅々にまで浸透し、機能している。実際、宗教を中心とするジャマアットの活動は、マハッラの日常生活、風俗習慣などと切り離すことができない。ジャマアットの主導的な役割により、マハッラの相互扶助システムが明文化されていない潜在的な文化的仕組みとして定着している。このような仕組みは、マハッラの地域共同体としての自律性を保持しているのである。

6. おわりに

以上、文献資料と現地調査に基づき、中国新疆南部の農村地域におけるマハッラの機能とその役割について、幾つかの項目に視点を据えて検討を試みた。その論点をまとめると次の四点を挙げることができる。

第一に、マハッラは、その構成や形成プロセスから分かるように、また地名の由来が人々の生活基盤を反映していることからも窺われるように、単なる地域の概念を示す存在であるにとどまらず、最初の地縁的、血縁的関係に由来しつつ、さらに歴史的な変遷とともに現在の形に発展したものであった。

第二に、マハッラにおけるモスクは人々の生活と密接に関わっている。実際、モスクは、単なる礼拝を行う聖所ではなく、マハッラ内部の様々な行事や問題に関する相談とその解決、それに共有財産の使用や管理などを行う場所であって、人々の日常的な活動においてすぐれて文化的な機能を果たしており、マハッラを地域共同体として特徴づける存在であると言っても過言ではない。

第三に、マハッラにおける近所同士の相互扶助システムが、マハッラを伝統的な地域共同体として機能させ、その中で、緊密な人間関係が築き上げられてきた。

第四に、このような地域共同体としての機能は、とくにジャマアットという長老の集団によって支えられていた。

マハッラは、中国新疆南部におけるウイグル人の伝統的な居住形態として、近年まで存続した。それは、当該地域における人々の思考や行動パターン、社会生活のあり方を基礎づける規範意識に影響を与え、それが次の世代へと継承されていく上で、一定の役割を担っていたと言えよう。

謝辞

1. 本研究は、日本学術振興会（JSPS）「平成 29 年度外国人研究者招へい事業」による共同研究成果の一部である。筆頭筆者が、JSPS 外国人研究者招へい事業により、大阪大学外国人招へい研究員として執筆の機会が得られたことに、甚深の謝意を表します。
2. 本稿は、日中社会学会第 29 回大会・開催校（大阪大学）企画シンポジウム「中国シルクロードにおける社会変容」において口頭報告した内容をもとに、大幅に手を加えてなったものである。本稿の執筆に際して多くの有益なご教示をいただいた新免康先生と、シンポジウムの席上、貴重なコメントをいただいた木村自先生に、深甚の謝意を表したい。
3. 本文系中国新疆维吾尔自治区普通高校人文社科重点研究基地中亚地缘政治研究中心招标课题“马哈拉的传统社会结构及其教育功能 ---- 以乌鲁木齐为例”（编号 :010316C03 2016-18），中国新疆维吾尔自治区社科基金项目“南疆绿洲马哈拉的传统社会结构研究”（编号 :2016BSH036 2016-18）的阶段性成果。

注

1）飴菓子の一種である。胡麻を飴で固めて細い棒状や板状などの形にしたものである。

2）ここで言う指導者とは、モスクの宗教活動全般を指導する統率者のイマーム、礼拝を引率するハティープ、コーランを暗唱するカリ、などを指すことである。長老とは、モスクを中心に宗教活動を展開しているお年寄りの集まりであり、伝統的な農村社会では多大な影響力を持ち、人々から尊敬されている存在である。

3）本調査研究は、平成 8 年度文部省科学研究費・国際学術研究「ウイグル民族と日本の子どもの生活環境の比較研究」（代表者：碇浩一）による。

参考文献

［日本語文献］

大谷順子 (2017),「シルクロードの開発政策「一帯一路」イニシアティブ」『日中社会学研究』, 第 25 号 , 37-43 頁 .

新免康，真田安，王建新 (2002),『新疆ウイグルのバザールとマザール』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 .

新免康 (2017),「シルクロードにおけるマザール参詣の諸相」『日中社会学研究』, 第 25 号 , 44-51 頁 .

森川哲雄 (2017),「新疆ウイグル自治区における牧民の定住化について」『日中社会学研究』, 第 25 号 , 52-61 頁 .

小松久男 (1978),「ブハラのマハッラに関するノート—O.A. スーハレワのフィルド・ワークから」『アジア・アフリカ言語文化研究』, 第 16 号 , 179-215 頁 .

ティムール・ダダバエフ (2006),『マハッラの実像—中央アジア社会の伝統と変容』, 東京大学出版会 .

王建新 (1996),「トルファン地域文化における“分立”と“統合”—ウイグル族の日常生活と聖墓信仰をめぐって」『内陸アジア史研究』, 第 11 号 , 41-64 頁 .

リズワン・アブリミティ (2017),「シルクロードのマハッラ——オアシスにおける地域社会」『日中社会学研究』, 第 25 号 , 62-66 頁 .

リズワン･アブリミティ (2001),「ウイグルの子どもの発達におけるマハッラ（地域共同体）の役割」『日本生活体験学習会誌』, 創刊号 , 39-47 頁 .

リズワン・アブリミティ（热孜万・阿布里米提），大谷順子 (2014),「中国新疆におけるウイグル族の学校選択」『21 世紀東アジア社会学』，第 6 号，156-171 頁.

［中国語文献］

袁大化修 , 王樹枏等撰 (1923),《新疆図志》百十六巻 , 東方學會據志局本重校正増補 , 天津博愛印刷局印行 , 民国 12 年（影印：民族図書館回疆組整理 , 天津回疆出版社）.

阿布都克里木・热合曼 , 热外都拉 , 西热甫・胡西塔尔 (1996),《维吾尔族习俗》，新疆青少

年出版社 .
阿布都克里木・热合曼等 (1989),《维吾尔民俗学概论》, 新疆人民出版社 .
阿布利孜・牙库甫等编 (1991),《维吾尔语详解辞典》(2), 民族出版社 .
阿布利孜・牙库甫等编 (1996),《维吾尔语详解辞典》(5), 民族出版社 .
曹红 (1995),《维吾尔族生活方式 ---- 由传统到现代的转型》, 中央民族大学出版社 .
哈德江 (2000),< 维吾尔族 Jamaat 群体研究 >《西北民族研究》(2), 200-219 頁 .
司马义・热西提 (2011),《维吾尔族乡村哲玛提功能研究》（修士論文 : 陕西师范大学）.
墨玉县人民政府地名办公室编 (1985),《新疆维吾尔自治区墨玉县地名图志》新疆大学出版社 .
洛浦县人民政府地名办公室编 (1987),《新疆维吾尔自治区洛浦县地名图志地名图志》, 新疆大学出版社 .
续西发主编 (1991),《南疆脱贫问题社会学调查》, 新疆大学出版社 .
买提热依木・沙依提 (1999),〈新疆维吾尔自治区喀什、和田地区维吾尔族儿童生活环境和双语学习调查报告〉《维吾尔族与日本儿童生活环境比较研究》.

［欧米語文献］

Sukhareva(1976),*Kvartal'naya pbshchina pozdnefeodal'nogo goroda Bukhary:V svyazi s istoriei kvartalov*,Moskva:Nauka.
Abulimiti, Reziwan and Otani, Junko (2015), Issues related to decisions on school selection for Uyghur children in Xinjiang, PRC, *Osaka Human Sciences*, Vol.1, pp.57-78.

Mahalla's social structure and function in a rural community of Xinjiang, China in the 1990s

Reziwan ABULIMITI and Junko OTANI

This paper focuses on *Mahalla* in the rural area of southern Xinjiang in China with an aim to explain the mechanism and function of its traditional society. Most of the Uyghurs in Xinjiang live in rural areas in the south. Considering such a state of population distribution, it is an important task to study the mechanism of *Mahalla*'s traditional society in the area in understanding the structure of Uyghur society. There has, however, been little previous investigation into the *Mahalla* in southern Xinjiang. This paper will present multi-dimensional description of the state of *Mahalla* from the perspective of human connections rooted in the local community.